

目的 江戸時代のサラリーマンである武士達は、官舎的要素を持つ侍町の住宅の中で、どのような住まい方をしていたのか。弘前藩に残されている戸御家中屋敷建家図面を資料として、中・下級武士の住居を対象に住まい方を検討してみることにした。

方法 中・下級武士として、分限帳と照らしあわせした後、建坪が100坪以下、又は、200石以下の棟の者に限り、229戸を選り出した。これらの住居について、住居規模、部屋の名称による使い分け、接客空間(表)と生活空間(裏)の意識などを検討した。接客空間として、玄関から座敷にいたる部屋を取りあげ、残りを生活空間とみなした。また、平面図上に書かれている、2階・かけたしについても検討を加えた。

結果 ①住居規模としては、平均26坪の敷地に、約42坪の建坪の住居を建てており、石高は、100石の武士が61.57%を占めていた。②接客空間の部屋の並み方は10タイ7〇にわけられ、このうち、玄関・広間・座敷という2室構成と、広間と座敷の間にもう1部屋加わった3室構成が最も多く、石高や建坪との関連をみると、広範囲にこの29イ7〇が分布しており、接客空間の規格化ぶりが見える。生活空間においては、常居(居間)・庭・物置・台所という基本となる部屋構成があり、規模が大きくなるにつれ部屋名に対する機能が一定化し、中奥的な境界空間も現われてくる。③二階という記入が、50坪前後の住居に多くみられ、生間空間の上に位置していることが多い。④かけたしという空間は、主屋から突出した形になっていることが多く、建坪に含まれていないこともあるため、後に増築した部分であると思われる。また、ほとんどが生活空間である。